

講演会（第 78 回例会）

演題： 演題：人生死ぬまで前向きに～人間万事塞翁が馬～

実施期日： 令和元年 5 月 30 日（木）

会場： アオッサ 706, 707 号室：

講師： 和田高枝氏

参加者： 75 名（内新会員 2 名）

和田氏とは三十数年来の知己である小林副会長の簡単な講師紹介で講演は始まった。

話の内容：

19 歳で市の職員に採用され、約 20 年間は体育振興課等で仕事に精を出す一方で、自家用車が極めて少なかった時代に運転免許をとったり、結婚した夫共々 83 歳で他界した父親の借金を背負って右往左往したり、とに角「井の中の蛙大海を知らず」でいろんなことに挑戦した。特に、将来の生活の不安に備える糧として資格取得に書道を始めたところ、大阪展覧会に入賞するまでに腕が上達した。師匠西山氏に師事したその十年間は、スミと酒の生活に入り浸ったと言っても良いほどであった。父は酒に弱かったが、母は強く、母の血筋を引き継いでいるらしい。結局 43 歳で書道をやめ、改めて市の職員としての仕事に没頭した。市民生活課では‘くらしの会‘の仕事、商工観光課では福井まつりの時期になると途端に忙しくなり、仕事が終わると片町へ繰り出す日々が続いた。大ジョッキでビールを 5 杯飲んでもケロツとしていた。アルコールの強さは母親に似ていたが、大胆・豪傑な点は父親似という感じがする。

男女の扱いに不平等感を感じたのは 20 代後半の頃であった。50 代の女性が 20 代の若造にまでお茶を汲んでいるのを見ると特に不平等を感じた。実際男子は女性に比べて早く主事から主査に上がっていた。当時女性には 43 人の主査候補がいたので、助役にその 43 人全員を主査に格上げして欲しいと団体交渉をしたが、回答は 3～4 名とのことで、それならけっこうと拒否したところ、男女雇用均等法発令時期間近かということもあってか 43 人全員が主査に昇格した。自らは市役所初代の課長に昇格した後は、10 名の女性課長が誕生した。その当時男性には女性課長の下では仕事をしたくないという雰囲気が漂ったが、その後女性の企業管理者や部長が出現するに及んで、現在ではそんな雰囲気はなくなっている。男女雇用均等法は女子職員には大きな福音となった。

49 歳の時国際交流課勤務となり、中国杭州市や高知市、また松平春嶽公の奥方・勇姫（いさひめ）や福井藩が指導を仰いだ横井小楠との人間関係もあって熊本市とも姉妹都市を結んだ。北海道の恵庭市とも友好都市関係になって多忙な日々だった。姉妹都市・杭州市訪中団を募ったところ、全員が女性職員には驚いたが、4 泊 5 日の日程で杭州市の女性職員と親

睦を深める結果となった。紹興酒で盛り上がり、親密な姉妹都市関係になった。

定年まであと1年という59歳で私には大きな転機が訪れた。当地区には女性県議が一人もいないからと補欠選挙への立候補を打診されたのだ。主人の勧めもあって立候補はしたものの、19歳で福井市役所に奉職して以来40年間にむしやりに仕事に打ち込んできたので、いざ選挙となると生まれ育った松岡には馴染みの人が少なく、地元の人からは「姉ちゃんが選挙に出る人か」と揶揄される状態だったが、約100票差で何とか当選を果たした。この時の市の対応は好意的で素早く、すぐに退職辞令、退職金を頂いたのも幸いした。

県議として最も印象に残るのは、当時高齢化社会や車社会の影響によりただでさえ京福電鉄の利用者が減少しているさなか、一回は正面衝突事故、半年後には車両事故と2度に亘る事故で、会社は採算が合わないとの理由で再建を断念した。突然、生活の重要な足を失った沿線住民は、代行バスや自動車利用への転換が余儀なくされる中、鉄道の利便性、そして鉄道が果たす社会的役割を痛感する。「鉄道は地域社会に必要なもの」として住民の熱意は、行政を動かし、京福電鉄路線は、第三セクター「えちぜん鉄道」として再スタートを切ったのだが、その時和田議員、婦人会会長、団体の役員を中心とする地元民約600人が勝山→観音町間を「電車を残せ」の大断幕とゼッケンをつけて、駅ごとにシュプレッヒコールを繰り返したという。マスコミも電車を残す必要性を報道し、芦原線の協力もあって、えちぜん鉄道は今も「地域の鉄道」として走り続けている。

だが、県議の任期を終えて再度立候補した時は、永平寺地区からの議員がいないという理由で「選挙は別」と言われ、電車を残す時ほどの協力は得られず、わずか23票の差で敗退した。しかし翌日には2度の事故にも関わらず地元の足となるえちぜん鉄道が残ったことに満足し、何のわだかまりもなく発奮した。

70歳になった時、当時85歳の老人会会長からその職を委託され引き受けた。老人会加入率が僅か9%と低迷し、「老人クラブ」という名称にも違和感を感じ、「健康長寿クラブ連合会」とか「芝原元気クラブ」の名称で、65歳を過ぎたら皆同じとの感覚で、プライドを捨て「前向きで楽しく」をモットーに今もその任を果たしている。

現在私は78歳。永平寺町健康長寿クラブ連合会の会長として、人生100歳時代を健康で長寿、賢く生きるための様々な活動に取り組んでいるが、樹木希林さんの人生訓「おごらず、他人と比べず、面白がって平気に生きればいい。人間万事塞翁が馬」の気持ちである。現在は朝昼晩とも主人と二人で大根おろし、酢の物、ヨーグルト、納豆の健康食品中心の食事をしている。生き方としては樹木希林さんの外、瀬戸内寂聴さん、京セラやKDDI創業者の稲森和夫さん、宇野千代さん、96歳で今なお活躍中の佐藤愛子さんや女性報道写真家の笹本恒子さん、101歳で亡くなられた吉沢久子さん、とりわけ107歳で亡くなられた地元の画家・豊田三郎さんとは手紙のやり取りを通じて特に親しくお付き合いしていただいた。

以上 大野 記

